
正夢

夢一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正夢

【著者名】

夢一

【ISBN】

N4471B

【あらすじ】

最近同じ夢を見る。修学旅行での殺人事件。友達から聞いた正夢といふことば。悲劇を回避するために少年は……

プロローグ（前書き）

グロテスクな悲劇が含まれています。

プロローグ

また同じ夢をみた。

修学旅行で泊まっているホテルでの殺人事件……

犯人はナイフで僕の友達の命を惜し気もなく奪っていく。

僕は部屋の端っこで座つて怯えていた……

犯人が近づき僕の前で足を止める。

顔は暗くわからない

犯人がナイフを振り下ろし僕は……

そこで夢から覚め僕は安堵の息をはくのだった。

しかしこの夢は何をしめしているのだろうか……

僕は不意にクラスの女子が話していた正夢という物を思いだす。
見た夢が現実となるらしい。

そして今日……

小学校生活で最後の泊まりがけの旅行・修学旅行の日だった。

第1話・決意

「よつちやん、起きてたらじい飯食べに来なさい」

母さんの声がする。

僕は額から流れる露を拭き取り立ち上がり寝巻のまま一階へ続く階段をおりる。

一階ではテーブルの上にパンと玉玉焼きがおいてある。

「おはよ。荷物の用意はできたの？」

僕はうなずき

「うん」

と答えた。

椅子に座り口でパンをくわえる。

「じやあ母さんはもう仕事に行くから食器は水に漬けておいて

母は小走りで玄関へ行き家を後にする。

僕はキッチンで包丁を手にとった。

犯人は僕らを刺し殺そうとしてくるだろう。……

友人を守るのは僕しかいない。

犯人はナイフという武器に安心しているはず、

なら僕はその安心から生まれる隙を狙つて逆に刺し殺せばいい。

できることじゃない

僕なりできる……

いや、やらなきゃならないんだ。

僕は包丁をタオルで巻き朝ご飯をすませ一階にあがる。

時間は午前6時30分。

集合時間まであと1時間30分。

今日の予定はバスでホテルまで行きそこで大きな荷物を預ける、そこから水族館へ行つてホテルでレクリエーション。

あとまじ飯を食べて各自で部屋につっこむお風呂にまじる。

包丁を隠すために一度鞄の中の物を取り出し包丁を奥にいれる。もちろん取りにくいくらい困るので奥に繋がる隙間をつくつとおいた。いつすればすぐに包丁をとりだせる。

集合時間まであと1時間もある。

適当にテレビを見る。

やはり緊張で心臓がバクンバクンと激しくなっている。

人を殺すという未聞の体験。

犯人を撃退したヒーローになれるかもしないという期待。

そんな物が僕の中ではじめじめと混ざりあっていた。

集合時間まであと30分くらくなつた。
そろそろ家をでることした。

「行つてきます」

僕は決意と共に家を出た。

第2話・修学旅行

学校についた僕は体育館に向かった。

体育館ではすでに何人もの人が集まっていた。

「よう良彦」

そういうながら小走りで僕に近づいてくる。

彼の名前は田中健一

サッカーが得意だが勉強はダメダメなスポーツ野郎だ……

僕はこいつは余り好きじゃなかつたが行動する班も一緒に寝る部屋も一緒だ。

「先生が班順で並べだってよ」

「わかった

僕は自分の班がいる場所にむかつた。

1番左側の1番前に僕の班員達がいた班構成は男子4人と女子3人。

男子は1番が安田 信二で2番目が中辻 拓海

あとはさつきいた田中 健一と僕だった。

「班の人気がそろつたら班長は先生に言いにこい！」

先生の声が体育館に響き僕らの班の班長健一が先生へ全員がそろつたことを伝えにいった。

その間僕らは他愛のない話をしながら時間を潰していた。

「は～い静かにしりよ

先生の声で少しづつながら周りの声が消えていく。

「今からバス乗り場にいくべ。 行く途中でもマナーを守り挨拶は忘れないようにな」

先生が自分のクラスを誘導してバス乗り場に向かう。 僕らも先生の後ろについていき5分程歩きバス乗り場へと到着した。

「順番に奥につめて入るんだぞ」

先生に言われ僕達は一番後ろの一番広い席に座る。

やはり修学旅行ということで周りのテンションも僕のテンションも上がっていた。

「お前さトランプ持ってきてる?」

拓海が不意に僕に話し掛けてきた。
僕は

「持ってるよ」

といいナップサックからトランプを取り出した。

「ナイス！ みんなでなんかやろうぜ」

「じゃあまずはババ抜きでいいんじゃないのか？」

全員が健一の意見に賛成し僕らはババ抜きをすることになった。

「チヨックメーイト！……グワアアア」

信一の声がバス中に響き周りが微笑する。

「ヤニー もうちょっと静かにしなさい」

先生に叱られ信一は舌をペロリと出した。

結局僕ら時間を忘れて1時間近くババ抜きに熱中していた。マイナーな遊びなのに面白い奴がいたら普通以上に面白くなる。

窓から外をみるとすでに高速道路で見慣れない景色が広がっていた。

しばらくして海が見えてくると

「海だ！」

とみんなのテンションもさり気なく上がっていた。

このままていられたら僕と僕は強く…強く願った。

僕らはホテルに荷物を置き水族館へ向かった。

水族館につき僕らはたくさんの魚を見た。

「す、いねえ 良彦君」

同じ班の女子が話しかけてきた。

「うん。 色んな魚がいるね」

「私ねこんなに楽しいの初めて。 みんなで笑ってさ……ずっとこうしてみたいね」

「うん」

そんなことは無理だとわかっているから人は強く願う。 变えられないとわかつて いるから人は変えようとすると。

僕はこれから起る悲しい悲劇を変えられるのか？

僕らは水族館を後にした。

第3話・悲劇・1

僕らはホテルについた。

レクリエーションでは歌を歌つたりクラスの出し物をしたりとこの上なく楽しかった。

ご飯では僕の嫌いな魚料理がでてきたので部屋で友達とお菓子を食べる。自由時間ということで各部屋から人が集まりはしゃいでいた。女子の部屋に侵入しようとする者や部屋で裸になっている者がいた。時間は僕らの意思を無視しながら過ぎて行く。

「全員部屋に入りなさい。部屋の鍵を取りに行くので先生に渡して下さい」

このホテルはオートロックなので一度外へ出れば中には入れないだろ。

僕は犯人がどうやってこの部屋にはいつてくるか考えた。

僕が見た夢は僕が起きた時には犯人はいる。

しかしこの中で仲間を殺すような奴はないだろ?と信じている。なら犯人は外部の奴だろ?……

先生か?

それともホテルの人か?

どちらでもいい……

僕らの幸せを奪う者は殺せばいいんだ。

カバンの奥にある包丁で刺し殺せばいい。

そうすれば僕はまだ幸せを感じていられるんだから。

僕らはベッドに潜り電気を消した。

鍵は僕が犯人について考えている間に渡してたらしー。

「なあなあ

拓海は小さな声で全員に話しかける。

「なんだよ?」

信一は興味深げに聞いた。

「お前、うつて好きな人……いるか?」

「ば馬鹿!……いるわけねえじやん」

完全に信一は動搖していた。

近所のお兄さんから聞いていた通りだった。

「夜になると誰かが好きな人の話とかしてくるぜー。これは絶対だな」

つて自信ありげに話していたつけ。

「ははは、びつやいり信一君にまじるひじいね

「俺はわかってるかも」

周りは信一の好きな人を推理はじめた。

3分後

「ちよい待て！あきちゃんは俺も狙つてるから」

「馬鹿か健一なんかに譲つてやるかよ」

「おおあああやんつてそんなにモテてるのか。意外だよなあ良彦」

「やつだね」

僕はそりは思わなかつたクラスで1番とはいかないものの顔は整つていて運動もできるし中々ボーイッシュだから。

小学生ではボーイッシュな子はモテるけど中学生になつてから女子っぽくなるとさらにいいらしい。（近所のお兄さん談）

楽しい話しだつたが僕は途中で睡魔に負けて眠つてしまつた。

第3話・悲劇・2（前書き）

これで最後です。初めて最後まで書いた本です（笑）。って言つてもまだ一回田でもう一つの作品はまだ制作途中ですから期待してください。

第3話・悲劇・2

妙に騒がしく僕は目を覚ました。

「あつ！」

部屋の扉が開き人が部屋に侵入する。

犯人の手には間違えなく小型のナイフがある。

犯人は足音をたてずに健一のベッドに飛び乗り口を押さえ腹を刺す。

「うぐっ..」

健一はその後動かなくなる。

僕は声がだせずにベッドから転げ落ちた。

必死に

「拓海逃げる」

つて声をあげた。

どうやら起きていたらしく部屋の扉に向かうが腹を蹴られて尻をつく。

僕はカバンを開け包丁をとりだそうとするが中々とりだせない。

『早く…早く！拓海が殺される』

心の中で叫びながら僕は包丁を手した…

「あぐ……」

拓海は床なドサッと倒れて痙攣してから動かなくなる。

「うひゅひゅ」

犯人のとても低い笑い声が聞こえる。

僕は犯人に怒りを覚えた。

それにわかつていながら寝てしまつた僕にいらついた。

はしゃぎ過ぎて疲れて寝てしまった。
はしゃがずに寝ていればと後悔した。

「殺す……」

低い声……

しかし今度は僕の声だった。

「お前なんかあああ！死ねえええ

僕は前屈みで犯人に突っ込んだ。

背中を刺された……

痛みを感じなかつた。

けど僕は犯人の腹を刺した

「うぐっ…嘘…だ…る。グファッ」

犯人は血をはいたて倒れた。

僕の意識はそこで途切れてしまった。

目を覚ますと僕は病院にいた。

周りには警察がいる。

『やつた…僕は信一や他のみんなを…守つたんだ!』

健一と拓海が死んだことは悲しかつた……

けどそれ以外のみんなを守つたんだと自分に言い聞かせた。

「起きましたか…」

警察の人が僕に話しかけてきた。
僕は褒められるんだと期待した。

「よくやつた
とか

「君はヒーローだ」
とかそんな言葉を期待した。

しかし…

警察の発した言葉は僕の期待を壊すどころじゃなかった。

「友人から事情を聞きました。君はまだ健一君と拓海君は死んでいると思つてますか?」

「はあ?」

わけがわからなかつた。もしかして健一と拓海は生き延びたのかと思つた。

「健一君と拓海君は怪我一つしていません。しかし信一君は……亡くなりました」

「嘘……でしょ?」

だつて健一と拓海は刺されたはず……

信一は僕が守つたじゃないか……

「わかりませんか?あなたが刺したのは信一君です」

「そ……そんな」

「信一君は健一君と拓海君を刺した……これでね」

警察の人が袋をだした。その中にはナイフがはいっていた。

警察は袋の中からナイフをとりだし僕に向け腹に刺してきた。

「うわああ！」

「…痛くない。

「これはおもちゃです」

警察は指先でナイフの先を押す。

ナイフの刃は徐々に小さくなり無くなつた。

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ！ 僕は信一を殺してなんかいない。 僕を騙そ
うたつてそういうかないぞ！」

僕は警察にタックルをした。

しかし警察はぴくりとも動かず僕はベッドに跳ね返された。

「なぜ君がナイフを持っていたか説明してもらいたい。 大丈夫、君
に非はないし逆に君を騙した彼らが悪い。だから何も気にする必要
はない… けど夕方にはお母さんが向かえに来るから一緒に帰りなさ
い」

「ふざけるな…」

低い声…

僕は警察にタックルする。

警察はあっさり吹き飛ばされ壁に頭をぶつけ倒れた。

僕は病室を抜けて走り回った。

「よつちゃん待って」

病室に向かっていた先生が僕が逃げているのを見て言った。

しかし僕は止まひとつしなかった。

いつのまにか僕は屋上にいた。

「僕は…僕わああ！」

助けたと思つた。

また幸せな時間に戻れると信じていた。

このまま人殺しで生きていたくはない……

先生が屋上に息切らしながらいた。

「よつちゃん…君は悪くないから…だから病室に戻る

僕はフェンスを上り景色を見渡した。

海が見える。

不意に水族館での事を思いだす。

「ずっとあの日の生活が続けばよかったのに…」

けど願つても信じても何をしても変えられないことがある。

人殺しとこう汚名は消えない信一君の命も戻つてこない。

「こんな世界消えてしまえ……」

低い声……

僕は飛び降りた。

第3話・悲劇・2（後書き）

今まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4471b/>

正夢

2010年10月9日21時07分発行